

京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター

平成25年10月～26年3月期

伝音セミナー

日本の希少音楽資源にふれる

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターでは、

平成25年度(10月～26年3月期)「伝音セミナー～日本の希少音楽資源にふれる～」を下記のとおり開催します。

日本伝統音楽の講座に参加するのは初めてという方にも気軽に受講いただけるセミナーですので、是非、ご参加ください。

第5回

義太夫節の「節尽し」を聴く I

日 時 平成25年10月3日(木) 午後2時40分～午後4時10分

講 師 山田智恵子(日本伝統音楽研究センター 教授)

内 容 「節尽し」とは、節(名称のある旋律型)を列挙したカタログのようなものです。義太夫節においては、その創流当時から、伝書中に「節尽し」が含まれていました。その後、さまざまな「節尽し」が書かれてきましたが、三味線弾きにより、実演・録音されたものもあります。そうした録音された「節尽し」をいくつか聴きながら、義太夫節における「節尽し」とはどのような内容で、何のために作られたのか、考えてみたいと思います。

第6回

義太夫節の「節尽し」を聴く II

日 時 平成25年11月7日(木) 午後2時40分～午後4時10分

講 師 後藤 静夫(日本伝統音楽研究センター 所長)

内 容 昭和30年代に録音されたと思われる「節尽し」には義太夫節に取り入れられた多様な音楽・芸能の「節」が分類し残されています。義太夫節がそれらをどのように取り入れ、活用し伝承してきたか。いくつかの具体例を聴きながら、義太夫節としての活用・伝承のあり方を検討してみます。

第7回

乗り物とレコード

日 時 平成26年1月9日(木) 午後2時40分～午後4時10分

講 師 大西 秀紀(日本伝統音楽研究センター 非常勤講師)

内 容 乗り物の進化は常に日本の近代化を支えてきました。よく「歌は世に流れ」といいますが、人びとは夢や希望やさまざまな思いを鉄道や船や飛行機に託し、そしてやがてそれらは歌になり、数多くのレコードに記録されました。今回は乗り物にまつわるレコードをご紹介いたします。

第8回

雅楽の今昔～復元・再現演奏を聴く～

日 時 平成26年2月6日(木) 午後2時40分～午後4時10分

講 師 田鍬 智志(日本伝統音楽研究センター 准教授)

内 容 日本の雅楽は、千数百年の伝承の間、洗練を重ねて今日に至っています。中世初頭(平安末期)から近代、そして現代、それぞれの時代の雅楽はどのような音楽なのでしょうか。古資料にもとづく再現演奏と古今の録音から、その軌跡をたどってみます。

第9回

岡本文弥の新内節を聴く その2

日 時 平成26年3月6日(木) 午後2時40分～午後4時10分

講 師 竹内 有一(日本伝統音楽研究センター 准教授)

内 容 新内節といふと、江戸の淨瑠璃というイメージが強いのですが、すでに幕末頃から京阪の都市でも、稽古淨瑠璃や読み物として流行し、鴨川べりや街中での「流し」も派生していました。昨年に引き続き、多様な活動で知られる岡本文弥(1895～1996)の演奏を聴きながら、新内節の魅力と基本的特徴を探ります。

受付 当日会場で、午後2時受付開始

会場 京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター

合同研究室1(新研究棟7階)

(京都市西京区大枝沓掛町13-6)

定員 各回につき、先着50名

主催 京都市立芸術大学

問い合わせ先 京都市立芸術大学 教務学生支援室(事業推進担当)

電話(075)334-2204

交 通 最寄り駅：阪急京都線桂駅・JR京都線桂川駅よりバスまたはタクシー

・阪急桂駅東口 京阪京都交通バス 1・2・13・14・25・28系統に乗車約20分、「芸大前」下車
(セブンイレブン前の2番のりば。平日の日中は毎時平均3本)・阪急桂駅西口 市バス 西1・西8※系統に乗車約20分、「新林池公園」下車(※昼間(10～16時)のみ)
市バス 西5系統に乗車約20分、「国道省掛口」下車

・阪急洛西口駅 ヤサカバス 桂坂中央行(1系統)に乗車約15分、「国道省掛口」下車

・JR桂川駅 京阪京都交通バス 11系統に乗車約15分、「芸大前」下車
京阪京都交通バス 12系統に乗車約20分、「芸大前」下車

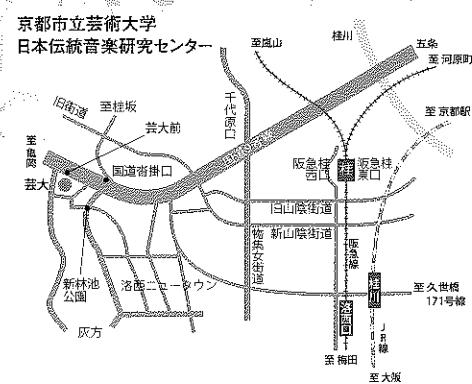
・JR京都駅 ヤサカバス 1・4系統に乗車約20分、「新林池公園」下車

・C2のりば 京阪京都交通バス 2・14・28系統に乗車約45分、「芸大前」下車
C5のりば 市バス 73系統に乗車約45分、「国道省掛口」下車

・四条烏丸 市バス 29系統に乗車約50分、「新林池公園」下車

●芸大前バス停から徒歩すぐ。国道省掛口バス停から正門まで約10分。●新林池公園バス停から正門まで徒歩20分。

*京阪京都交通バスについては、系統により所要時間が異なります。(このデータは平成25年7月現在のものです。)



伝音セミナー「岡本文弥の新内節を聴く その2」

2014年3月6日 竹内有一

1. 岡本文弥とはどういう人か

- ・岡本派の再興。古典曲の緻密な研究（音楽伝承、正本その他の史料）。

町田博三『江戸時代音楽通解』（古曲保存会レコード、1921）への協力。

『新内曲符考』（1972、同成社）、『新内淨瑠璃古正本考』（1979、同成社）などの著作多数。

- ・旺盛な創作意欲。長生き、ユーモア

○派手な技巧や美声というよりも、「語りもの」としての淨瑠璃「らしさ」を追求した一途な姿勢が、芸風にあらわれ、残された多くの音源からも感じとれると思う。（私見）

名は井上猛一。母は鶴賀若吉から富士松加賀本ハを継て三代、岡本家業を名のる。早大中退。劇や鶴賀千賀などに師事し、大正初期より七代、富士松加賀太夫の一門となり、加賀路太夫。大正二年（1913）岡本派を再興し、四代家元と名乗る。後に文跡を名める。大正中期より発表した作品は二〇〇曲以上にもおよび、作曲作詞ともに手がけた曲も多い。昭和中期に発表した「西部戦争義挙なし」などの左翼傾向の作品は、赤い新内、プロレタリア新内などとして話題になった。また、新内舞踊というジャンルを新たに切りひらき、舞踊伴奏用の作品も多くつくった。ほかに新内研究家としての活動もあり、著作物も多い。古典の稀曲の伝承を得などから受け継いだ。作品に「今声心中」「十三夜」などがある。【著】『新内淨瑠璃古正本考』（一九七九）【参】林えり子『ぶんや淨瑠璃節くわく』（一九八三）

『日本芸能人名事典』1995、三省堂

2. 新内節「明鳥夢泡雪」の概要（主人公の浦里・時次郎を中心に）

- (1) 鶴賀若狭操作。1772年(安永1)作。
- (2) 浦里は親のために吉原の山名屋に身を沈めた女性。
- (3) 時次郎の父は田舎により、江戸表の地頭に年貢金200両を払うような裕福な家で、家宝に小鳥の名刀を持っている。
- (4) 息子の時次郎は浦里になじみ、年貢金を使いこみ、方々に借金をして、浦里に会えぬようになる。
- (5) それを無理して山名屋へ上がり、浦里の部屋に忍んでいたが、遣手のかやに見つかり、時次郎は表へたたき出される。
- (6) 浦里は禿（かむろ）のみどりとともに庭の古木に縛られ、山名屋の主人に責められる。
- (7) 時次郎は2人を助け、塀を越えて逃げ出す。
- (8) モデルは1769年(明和6)7月の伊之助・三芳(吉)野の心中事件。
- (9) その後、富士松魯中が1857年(安政4)にその続編として『明鳥後真夢（のちのまさゆめ）』を発表した(原作は為永春水・滝亭鯉丈(りゆうていりじょう)合作の人情本『明鳥後正夢』)。続編では2人は時次郎の叔父が住職をしている深川の慈眼寺まで逃げ、その墓地で柳の枝にしごきをかけて心中する。しかし小鳥の名刀のおかげで息をふき返し、2人は夫婦となる。禿のみどりを2人の間の子とする話もある。

平凡社『世界大百科事典』「浦里・時次郎」(竹内道敬執筆項)より再構成

3. 鑑賞のツボ

- (1) 豊後系淨瑠璃の「節」(部分部分を区切りつつ連続させる、しなやかな構造とその感覚)を意識する。実演家やすぐれた鑑賞者はこれを無意識のうちに体得している。古正本に版刻される文字譜（書き込まれた「朱」なども）は、一つのヒントになる。
- (2) 「節」と詞章内容（筋書、言葉）の間には、関連性が強い部分と、そうでない部分がある。



No.3
モルヒニウム

明烏夢泡雪
(浦里部屋・雪責め)

明烏夢泡雪
(浦里部屋・雪責め)

罵りて、
「浦里さん、浦里さん、ちょっとお田にかかりましょう」と、
「呼び立つれば、浦里はつと思えど、そしらぬ顔して、
浦里 「あい、何の用でござんす」と、
「いえばかやが、つこと声、
かや 「いや、ほかの用でもござんせぬが、あの前のお客衆は、きけば昨夜から
居続けにござんすげなが、若い衆に問うても、どの客衆やら知らぬと、いう。
今の口舌の科白も、時次郎さんにきわまつた、旦那が呼ばんす、さあござん
せ」と、浦里が手を取つて引つ立つる。
やら腹立ち、引つ立てこそ下りにける。
「あとに大勢男ども、あの客ゆえにあのように、憂目に逢わしやる浦里さん、
ことに掛けられてもよほどあり、それに隠れて二階へ上り、居続けなどとは太い奴、
引きずり下ろして踏みのめせと、恋路の闇の暗がりを、無二無三に引き出だし、
踏むやら打つやら、むしるやら、叩き据えられ是非もなくなく箱梯子、ようよ
う伝い下りけるを、すぐに表へ突き出だし、門の戸はたと差し固め、錠さす音
ぞきびしけれ。

(前編) 春雨の、眠ればそよと起され、乱れそめにし浦里は、どうした縁でかの人に、逢うた初手から可愛いさが、身にしみじみと惚れぬいて、こらえ情なきなつかしさ、人目の闇の夜着の内、明けてくやしき鬚の髪、撫で上げ撫で上げ、浦里 「のう時次郎さん、このように堰させられ、さぞ気つまりにござんしょう、それをこらえて下んすも、わたし可愛いと思うてのお志、嬉しうござんす、かたじけない」と、抱き締むれば、いや俺ゆえと、引き締めて、物をもいわず締め合ひて、跡は涙にくれけるが、男涙をはらりと流し、

時次郎 「いつまでこうしていたとしても、限りもなき二人が仲。長居するほどそなたの身詰まり、このほどだんだん話す通り、國の親父の江戸表、地頭の方へ出だす金、二百両はさておいて、そのほか一門出入り屋敷、騙り尽くしてこのありますま」

「そなたも共にといいたいが、いとしいそなたを手にかけて、どうなるものぞ、永らえてわが亡き跡で一遍の回向えいこうを頼む、さらばやと、いい捨て立つを取り付いて、あんまり酷い情なや、今宵離れてこなさんの、健まあでいさんすその身なら、また逢うことのあるうかと、楽しむこともあるべきが、死のうと覚悟さんした身を、いかな気強い女子じやとて、どうして放しやらりようぞ、かねて二人が取り交す、起請誓紙はみんな仇、(合)どうで死なんす覚悟なら、三途の川もこれこのように、二人手をとり諸共あわせと、なぜにいうては下さんせぬ、わしゃやりはせぬ、放しはせぬ、殺しておいて行かんせと、男の膝に縋り付き、身をふるわして、泣きいたる。

・ 朝章出典：「新内名曲選(1)」
東芝EMI, S57年

・ 増経出典：文殊手作りカセットテープ
部分 No.3 「きよく明鳥」、発行年未詳
(近代の歌舞伎幕行のコピーと
思われる。上演年等未調査)



昨日の花は今日の夢。原地は宝曆七年（一七五七）刊の「女里赤寿年譜」にのつていて、「いもせ川。当時流行していためりやすである。「浦えば恨みもなきものを」のあと、同書には、「なんば尋ねても最清が行方水の底迄古屋は知らぬ。どうでも重機神ちやもの、後の朝のばかり發る思の妹背川」とある。「壇浦史記」の阿古屋の琴責めをうたったもの。雪責めにこの琴責めを使っているのは、いかにも対照的。「つけたり」にも書いたように、宮園節「タギリ」の真似である。

浦里 「ちええ、お情あるお言葉なれど、こればつかりはどうも忘られぬ、お許しなされて下さんせ、まだこの上にどのよう、悲しい苦しい責め苦でも、わしや厭いはせぬ、どうなつても思い切られぬ、いつそ添われぬものならば、一緒に死にたい、のう時次郎さん、殺して下んせ、ちええ、わしや死にたいわいのう」

三下り頃 〔昨日の花は今日の夢、今はわが身につまされて、義理という字は是非もなや、勧めする身のままならず。〕

浦里 「ちええ、この苦しみにひきかえて、あの二階の三味線は、いつぞや主の居続けに、寝巻のままに引き寄せて、互いに語る楽しみの、今宵はひきかえ今じろは、どこにどうしていさんすやら、とにかく添われぬ二人が身の上、ちええ味氣なき浮世じやなあ」

三下り頃 〔好いた男に、わしや命でも、何の惜しからず露の身の、消えば恨みもなきものを。〕

浦里 「これみどり、さぞそなたは悲しかる、わしが憎からう、こらえて給も。悪い女子に使われて、思わぬ苦しみ、堪忍しや、今宵に限りこの雪は、何の報いぞ、おお、さぞ寒からう、可愛いやのう」

みどり 「いえいえ、私は寒うはござんせぬが、次郎さんはあのように、若い衆に叩かれさんしたが、お前はくやしゅうござんしよう。私も悲しゅうてならぬわいのう」

浦里 「おお、よういうてたもつた、よういうてたもつたのう、そなたまでさえ、そのように」

〔主を思うてたるもの、わしが心を推量しや、何の因果にこのよう、いとしいものかさりとては、傾城に誠なしとは、わげ知らぬ、野暮の口からいきすぎの、粋の粋ほどはまりも強く、（合）ただなつかしうとしさの、愚痴になるほど恋しいもの、たとえこの身は淡雪と、共に消ゆるもいとわぬが、この世の名残りに今一度、逢いたい見たいとしゃくり上げ、狂氣の如く心も乱れ、涙の雨に雪とけて、前後正体なかりけり。〕

〔男はかねて用意の一腰、口にくわえて身を固め、しのび忍んで屋根伝い、それと見るより悲しさの、伝えて撓む松ヶ枝も、今宵一夜の掛け橋と、足もそぞろに定めなき。〕見るに浦里嬉しやと、悲しき怖き危なさに、飛び立つばかりに思えども、身はいましめの蔦蔓、降り積む雪に閉じられて、せんかたなくも鶯の、塘ただようばかりなり。（合）

〔何なく下へ下り立つて、二人が縄を切りほどき。〕

時次郎 「これ浦里、ここで死ぬるは易けれど、逃るるだけは落ちて見ん、ついこの場を越すばかり、幸いこれなる松の枝、伝うて行かん、もろとも」と、

〔互いに手早く身ごしらえ、みどりも共にととり繩る。可愛いやこの子は何とせん、おお心得たりと、みどりを小脇にひつかえ、かいがいしくも時次郎、松の小枝を浦里に、しつかと持たせ、あたりを見廻し、（合）忍び返しをひづばずし、梯子となしてさしおろし、（合）ようよう三人屏の上、下りんと思えど女の身、（合）浦里は胸を据え、死ぬると覺悟をわめし身の上、なにかいとわん、さあ一緒に、手を取り組んで一足飛び、げにもつともとうなずきて、互いに目を閉じ一思い、ひらりと飛ぶかと見し夢は、さめて跡なく明鳥、後の噂や殘るらん。〕

45

50

55

60

65

●傾城に誠なし。遊女が客に對して誠意をもつて接するはずがない。「女郎の誠と邪の四角、あれば晦日に月が出来る」など。
●はまりも強く。惚れ込みかたが強く。「はまり」とは、女色などに熱中するあります。
●拂むりゆるやかに曲がる。しなう。

●鶯の鳴ただよう。浦里は轡られでいるので、時次郎を手伝いたいが、どうすることも出来ない。
●忍び返し。盜賊などが櫻をのりこえて入り込まないよう、櫻の上にとがった竹や木を打ちつけたもの。鎗絆を参照。
●明鳥。夜明けになくからす。男女の朝の別れの情緒をあらわすのにも使われた。
●さめて跡なく明鳥。「跡無」と「跡く明鳥」を続けた。



豊島国太夫正本「あけ鳥」